

伊那路 五十二年一月号（通刊二四〇号）拔刷

今泉遺跡緊急発掘調査概報

伊那市教育委員会

今泉遺跡緊急発掘調査概報

伊那市教育委員会

はじめに

今回の発掘調査の動機は中央高速道路の開通にともなう伊那インターの設営、伊那インターから国道一五三号線に通ずる道路がアクセスである。皆様方が周知の通り、中央高速道路は昨年の夏に駒ヶ根インターまで開通していた。本年の夏までに辰野の伊北インターまで開通する計画が急テンポで具体化の運びとなってきた。当然

これに接するアクセス道路の開通工事も急速化してきた。以前より

伊那市教育委員会は当ルート内に今泉遺跡が該当すると積極的に提唱してあつた為に市建設部より緊急発掘調査の依頼が教育委員会にあつた。教育委員会側は調査団員や調査団長の意見を聞き、受理する措置を取つた。

調査は昭和五十一年四月九日から昭和五十一年四月十二日の三日間にかけて行なつた。その成果は土塗三、柱穴群一だけであつたが今泉遺跡の北限範囲が把握できた点では大きな成果があつたものと考えられる。

跡地までのルートは国鉄飯田線伊那北駅で下車し、北へ三〇〇m程行くと、左側に営林署があり、その地点からさらに北へ一〇〇m程行くと国道一五三号線とアクセス道路の交わる交叉点があり、通路を左にとつて、西へ五〇〇m程行くと遺跡地にぶつかる。遺跡存在面は天竜川右岸第三段丘面にある。遺跡地の地形や地質を述べることにしよう。

天竜川の第三段丘面と小沢川の形成した洪積世扇状地の扇端部の合わせた場所で、この段丘を神子柴段丘と呼んでいる。この段丘は上伊那誌の自然篇によれば、次のように記されている。『現河床から一〇m～二五m位の高さで、下流にいくにしたがつて高度を増している。大泉礫層を削つて、小坂田ロームの上部と薄い礫層をのせ、波田ロームに覆われて侵食面によつて代表される侵食段丘である。

当地附近は昔から豊富な湧水があることで知られている。発掘地の南側五〇〇m位の場所で、御子柴一雄氏が、豊富な水を利用してマスを育てている。

二、位置と自然的環境

本遺跡は長野県伊那市御園区南部字今泉地籍に存在している。遺



第1図 位置図及び遺跡分布図 (1:20,000)

- | | | | |
|-------|--------|--------|--------|
| ① 高尾 | ② 鳥居原 | ③ 石塚 | ④ 今泉 |
| ⑤ 原垣外 | ⑥ かんせん | ⑦ 御園東部 | ⑧ 御園南部 |
| ⑨ 宮の前 | ⑩ 清水洞 | ⑪ 牧ヶ原 | ⑫ 大清水 |

三、歴史的環境

今泉遺跡が世に知られるようになった端緒は、大正末年、鳥居竜藏博士が上伊那地区を調査された時である。その調査の内容は『先史及び原史時代の上伊那』に記載されている。その後、昭和三十五年に、林茂樹氏指導のもとに伊那中学校考古学クラブ員達がマス池の北側を調査し、大きな成果を収めている。

周辺遺跡のなかで、現在までに調査された遺跡は鳥居原遺跡、牧ヶ原遺跡、高尾遺跡の三か所である。

周辺遺跡の内訳を簡単に述べると次のようになる。

高尾遺跡は縄文前期、縄文中期。鳥居原遺跡は縄文中期、土師器

須恵器、灰釉陶器。石塚遺跡は縄文早期、縄

文前期、縄文中期、縄文後期、縄文晚期、土師器、須恵器、灰釉陶

器。原垣外遺跡は縄文前期、土師器、灰釉陶器。かんぜん遺跡は縄

文中期。御園東部遺跡は縄文中期、土師

器、須恵器、灰釉陶器。宮の前遺跡は縄文前期、縄文中期。清水洞

遺跡は縄文中期。牧ヶ原遺跡は旧石器縄文中期、弥生後期。大清水

遺跡は縄文中期。現在までに発見されている遺物によつて、その内

訳を述べてきたが、今後の開発等によつて新たな遺物の発見される

期待が濃厚な一帯と考えられる。

四、調査日誌

四月九日（金）

第1号土壙、第2号土壙、第3号土壙、第1号柱穴群の掘り下げを終了し、清掃及び写真撮影を終え、各遺構の実測と全測図の作製。

四月十日（土）

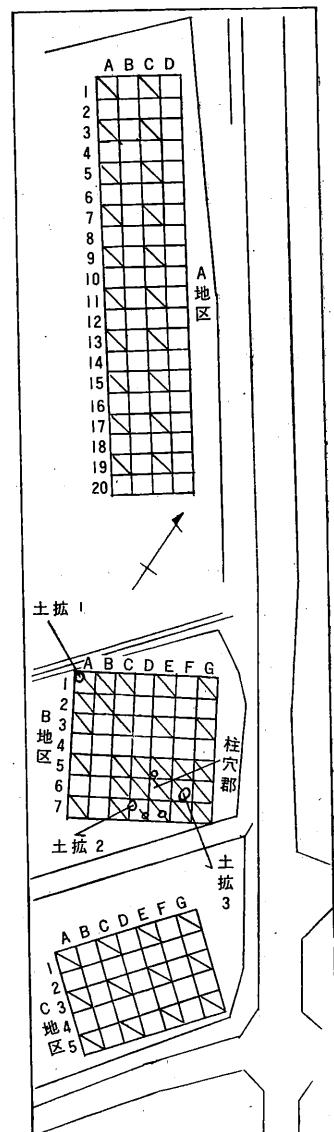
中央道の近接道路としてのアクセス道路は伊那市西箕輪大萱から伊那市御園までの間である。ちょうど用地内の中段には数多くの遺跡があり、そのなかに今泉遺跡が該当していた。前日、遺跡に指定された用地内へブルトーラーを入れて、耕土剥ぎを実施してもらう。本日は西側よりグリット打ちに主力を置いた。それによると一番上の水田をA地区、次をB地区、次をC地区とする。

A地区の西側に南から北へA→D、西から東へ一→一〇と決め、一つ置きにグリットを掘り起していく。耕土をはいでおいたおかげで、わずかに一〇数cmでローム層に及ぶ、本日はA地区を全て終了する。

四月十一日（月）

昨日と同様の方法で、B地区にグリットを設定し、一つ置きに掘

り進めていくと、A1に落ち込みを発見し、第一号土壙とする。それから東側へ掘り進めていくと、それぞれ落ち込みがみられ、第2号土壙、第3号土壙、第1号柱穴群と名付け、拡張を進める一方でC地区にグリットを設定する。そして、それを掘り進めたが、C地区内では遺構の検出はなかった。



第2図 遺構配置図

五、土 拢

第1号土壤（第3図、図版3）

耕作土層面より四〇cm位下つたソフトローム層面を掘り込んだ土拵で、南北九三cm、東西七五cmほどの規模を持ち、長円形プランを呈している。

壁高は東六二cm、南五三cm、北六四cm、西六五cm位を測定でき、

壁面全てにわたって垂直に近く、凹凸は著しい。

壁の上半分はソフトローム、下半分はハードロームである。床面はハードローム層でかたいうえに、さらにかたく踏みかためてあつた。

床面は水平であり、中央部付近には、円形のピット状の凹みがあつた。覆土は黒色土が落ち込み、検出時には明瞭にわかつた。遺物は何も発見されなかつたが、炭化物は多量に検出された。

第2号土壤（第4図、図版4）

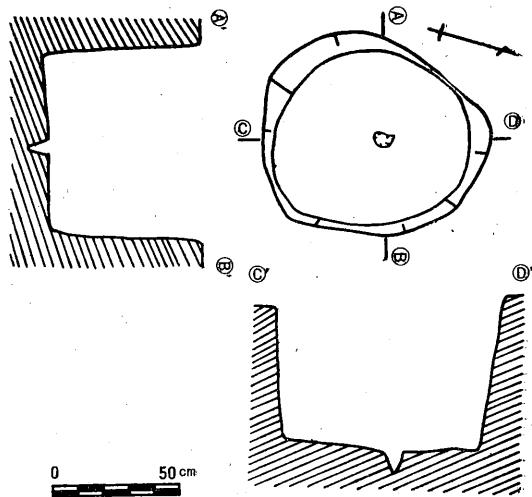
B地区D7に発見され、耕土面より四五cm位下つた褐色土層面を掘り込んだ土拵である。従つて、覆土はその上層の土層である黒土層であつた。規模は南北九七cm、東西一〇二cm程で円形プランを呈している。

壁高は東四五cm、南四三cm、西四一cm、北四一cmで、凹凸は顯著

であった。壁面の下部はわずかに、わんきょく氣味であつた。

床面は軟弱で、わずかに南に傾斜していた覆土中より多量の炭化物と三片の土器が検出できた。土器片は平出式A式、新道式、加曾利E式であつたが、床面に最も近い所からは加曾利E式が出土した。そこで、一般的に考えてみるとならば本土拵は繩文中期後葉と考えられる。

第3号土壌（第5図、図版5）



第3図 第1号土壌実測図

ピットが存在していたが、何のためのピットかは不明であった。
床面はハードローム層で、しかも、かたくたいてあり、ピット
や中段を除いた面は大半が水平であった。
覆土中より少量の炭化物と焼土の検出をみたので、人為的な土壤
には相違ないと思われる。

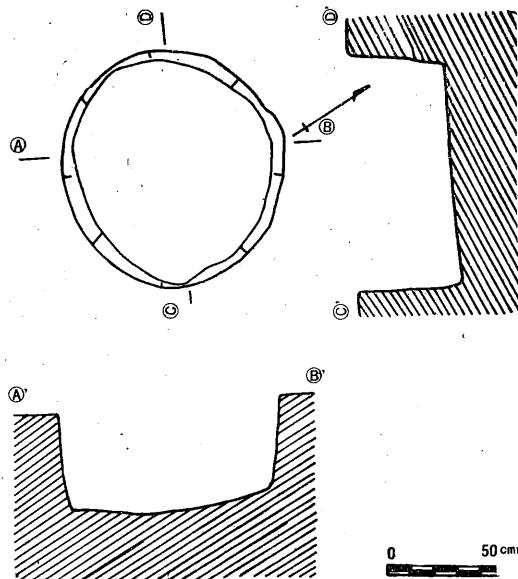
第1号柱穴群（第6図）

B地区のE5、D7の二つのグリットに一つづつ発見された柱穴
群で、前者をP1、後者をP2とした。

耕土面より三〇cm位下ったローム層面を掘り込んだ土壌で、南北
八五cm、東西七七cm程の円形プランを呈している。

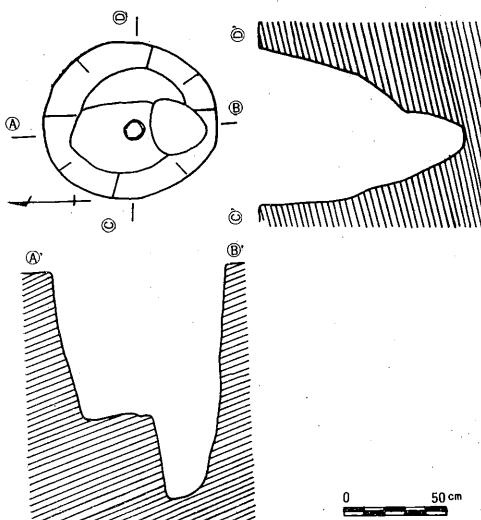
壁は全周しており、その高さは六五cm～七〇数cm位の間に計測で
きる。壁面の上部は垂直で下部へ下がるに従つて彎曲の度合が強く
なり、また中段付近より垂直に近くなる。下部はハードローム層に
達している。

床面は中央部へ行くにしたがつてくぼんでおり、中央部に小さな

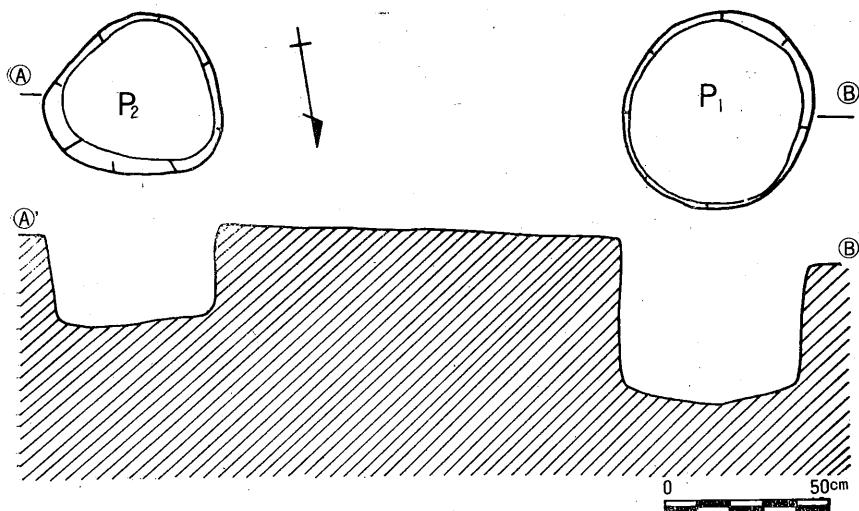


第4図 第2号土壌実測図

柱穴の掘られた土層はローム層であり、その中の覆土は黒色土であった。
 P₁の直径は五六cm、深さ四五cm程で、正円形に近い、壁面はかたく、垂直に近い、床面は中央部がなだらかに凹み状になつており軟弱氣味であった。
 P₂の直径は五〇cm、深さは三〇cm程で、若干つぶれ氣味の円形に近い。壁は垂直に近く、かたくなつていていた。床面はなだらかな傾斜が東から西へ走つていた。



第5図 第3号土塙実測図



第6図 第1号柱穴群実測図

六、出土遺物

土器(第7図)

今泉遺跡では三、歴史的環境で触れたように縄文早期、縄文前期、縄文中期、縄文後期、縄文晚期、土師器、須恵器、灰釉陶器の出土が以前には見られたが、今回発掘地点の土器は縄文中期初頭から中期後葉にかけての資料が検出されている。

(1～3) は第2号土塹から出土した土器である。1は無文部と波長の短い波状沈線が組み合わさっている。少量の雲母を含み、赤茶褐色を呈し、焼成は良好である。

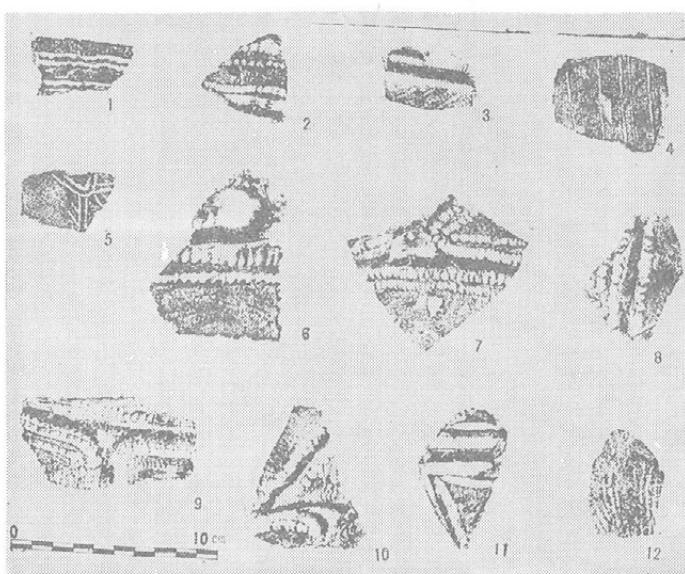
(2) は赤褐色を呈し、少量の雲母や長石を含み、焼成は中位である。文様は竹による爪形文が横位に入っている。

(3) は隆帯が横位に走っている文様と、斜繩文とであつた。多量の長石を含み、焼成は中位で、黒褐色を呈している。

(1) は平出3A系統、(2) は新道式、(3) は加曾利E式に属しているものと思われる。

(4～12) はグリット内から出土した土器である。(4～5) は沈線を単純に縦位に入れ、(5) は沈線が右半分に複雑に入り、左半分は無文部を成している。(4) は赤褐色、(5) は黒褐色を呈し、多量の長石粒を含み、焼成は良好である。(4～5) は平出3A系統に比定できよう。(6～11) は隆帯の縁に爪形文や刻目文が入っているもの。(6) は隆帯の終末が突起状になつてゐる。(6～11) は黒褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好であった。(9～11) は赤褐色を呈している。

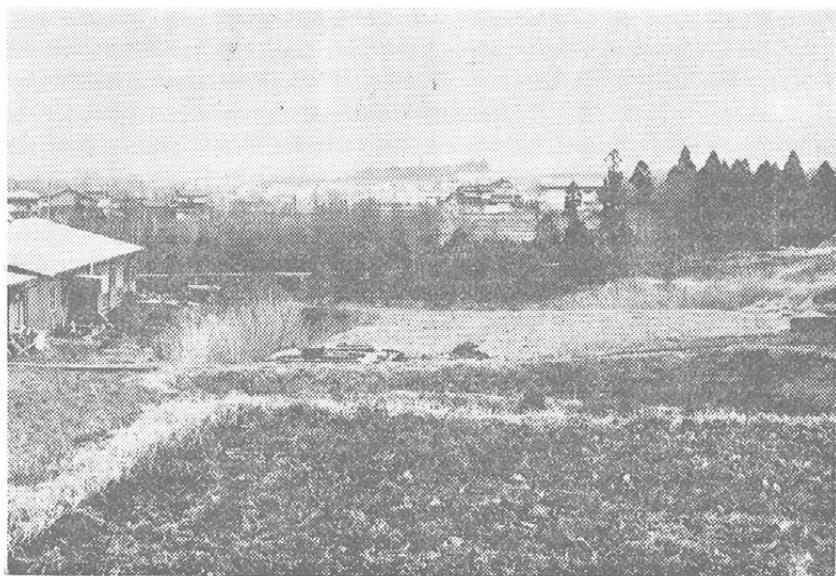
(12) は斜繩文を全面に配してある。多量の雲母を含み、焼成は中位である。



第7図 土器拓影



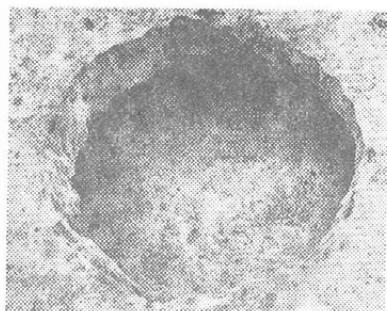
図版1 遺跡地を南側より望む



図版2 遺跡地を東側より望む



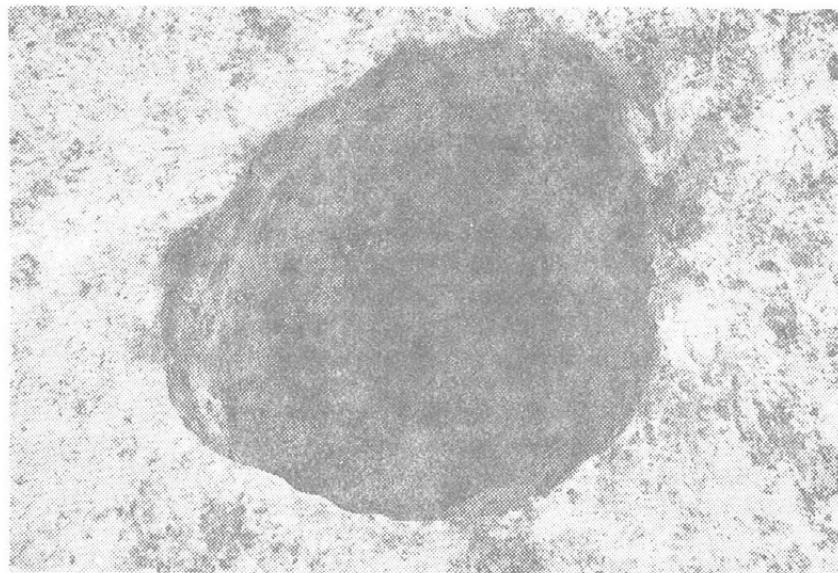
図版3 第1号土塙



図版4 第2号土塙

(五
十
一
年
十一月稿)

(6～11)は勝坂期の古い方で、信州では落沢式、新道式に含まれる。(12)は井戸尻期に属していると、それぞれ考えられている。



図版5 第3号土塙

